



三國七高僧傳圖會

本朝之卷

三



三國七高僧傳圖會本朝之卷目錄

源信僧都傳

第一 源信幼推感靈夢並從旅僧登北嶺

第二 源信布帛餽母却蒙諫言

第三 謁空也源信問淨土往生

第四 源信遇母臨終并撰往生要集

第五 朱仁聰見源信驚嘆博覽

第六 多田滿仲發心並迎接會修行

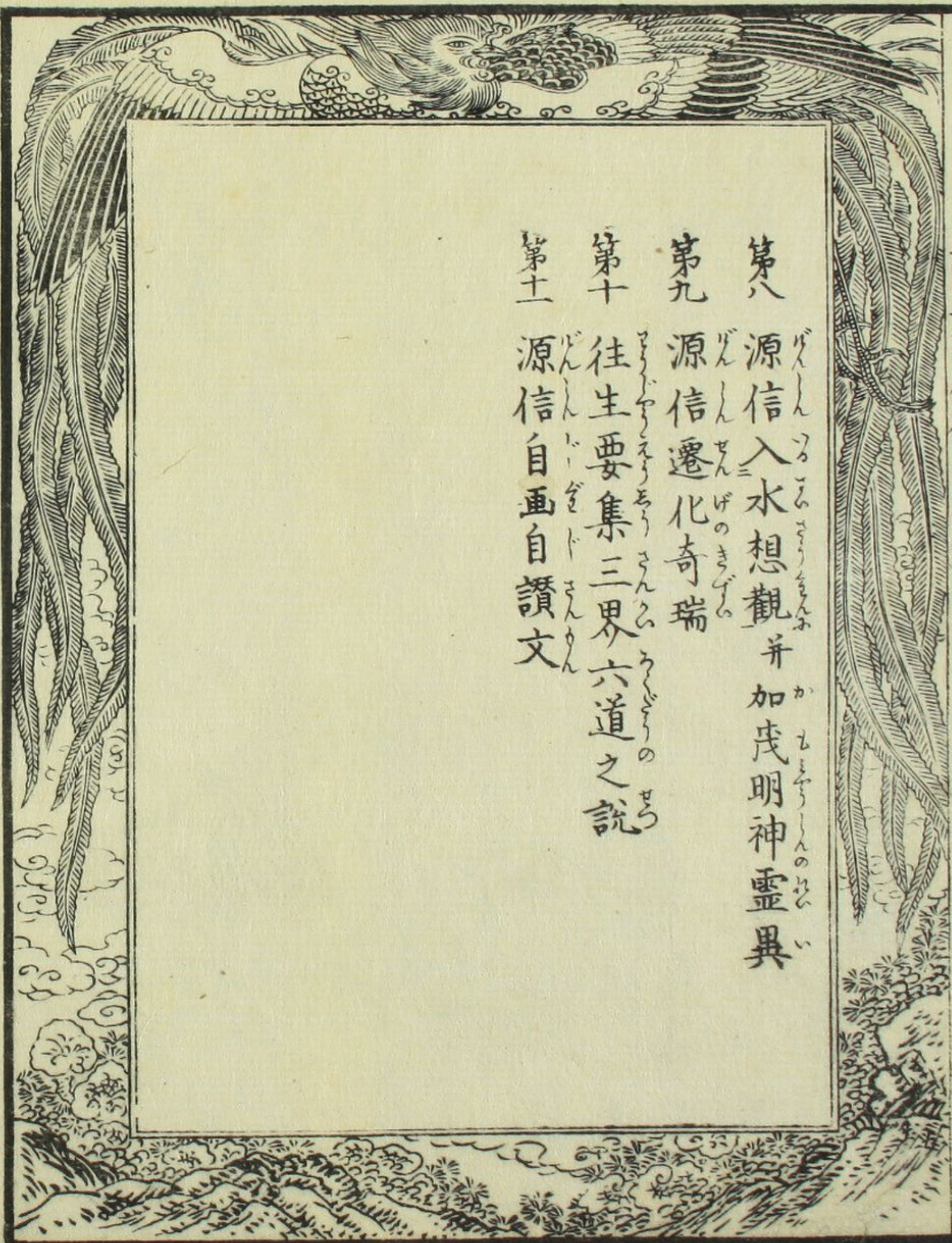
第七 平維茂都文士等逝去

五曜文庫



三國七言作行國參卷三

- 第八 源信入水想觀并加茂明神靈異
- 第九 源信遷化奇瑞
- 第十 往生要集三界六道之說
- 第十一 源信自画自讚文



三國七高僧傳圖會本朝之卷

杓祀 卷一 禪居士編輯

源信僧都傳

本傳曰釋源信。姓ハト部氏和州葛下郡當麻卿の人也。父ハ正親。母ハ清原氏夫婦。小子ハ一。同郡の高尾寺なる觀世音と祈ると三年。母の夢。小僧來て美玉と授ると見て懷妊也。此よりして母奉止必じ禮と正しく一葷腥と食せ。天慶五年。小生る。天性穎悟。風姿凡兒。小秀。以父母甚これと寵愛。七歳のとき父と喪ひ。父遺言して曰。汝必じ出家修道して。マダ菩提を助けよ。夫より已來。常小是と念じて措じ。或日齋戒して高尾寺。小詣て觀音の前。小誓て曰く。我必じ父の遺命と奉じて出家せん。願くハ大悲照鑒し。之と。夫より日々小詣て。其尊像と拜する。と三年。又日々小瓦の塔と作る。一千基。小滿て。以て父の追福。小薦む。歳九才。小て夢に



源信幼雅の
旅僧と問答
しるし

高尾寺に詣りて經藏の中に入て見らふ。許多の鏡ありて大なるあり。小きあり。明らるあり。暗らるあり。同くあり。去る一僧ありて其鏡を取て源信に示す。源信うけて是と見らふ。小なり。而も暗らるあり。源信の曰く。我は大方て且明らるりと得んと欲と。僧の曰く。但持て置る。横川に至て是と磨けんと宣ふ。見らひて夢覺ぬ。甚怪とて母に告ぐ。母の曰く。鏡は智慧なり。其明らるもの磨く不及と。今汝が幼少して智慧あり。其小なり。暗らる如く。若く叡山に登りて心の暗と磨く。智明らる發して其思ふ所の者と得べし。源信聞て喜びぬ。時此卿に二流の川あり。南は濁。北は清なり。日々小多くの小見と俱ふ。其流の傍に嬉戯れり。かき程一個の僧ありて鉢と持來て流に洗ふ。源信の曰く。其水ハ穢と濁らる。清きとて洗はんと。僧戯に答て曰く。諸法本淨不淨。何ぞ清濁と論ぜん。源信の曰く。既淨不淨。何ぞ洗ふと。用ひを言捨て。俛て碑と數ふ。僧愕然たりしが。源信の碑とかがらるを見く。

問て曰。一より九に至るまで皆つの音あり。唯十より一の音なき。如何。源信曰。五の數ふ二のつの音ありと。後源信の言ありて。僧も亦肝とつづけて益奇とす。故に其父母が居所と問ふ。答曰。幼少して父と喪ひ。唯老母のみあり。家此より東北の村にあり。貧うて客と待とせし。師は世の外に今來り。辱來臨あり。伴奉る。遂に此僧と連て業を修む。我家に歸り。母に此由を告。僧母に對て曰く。此見甚だ奇き。器量あり。後必だ大徳とらん。これと吾山の叡山の行者。良源の弟子とあるんや。母過一頃の夢を憶合して大に喜ぶ。我らて出家をせしむ。移る所あり。貴僧あり。討し給れ。と答。僧數喜び。約して叡山に去り。良源上人如此の。と告ぐ。良源も俱に。人々と大和國に遣りて。これと迎ふ。此時母あり。衣と裁て。これと着せ。告て云。汝謹て良源上人の事て修學し。空しく光陰を送らる。これ他日學問成就して。名と四海に傳へらる。我乃汝と召ま。若然らる。と云ふ。

是と永の別と思ふ。啓て父母の未來の苦と故に拔ん。是汝の力なり。思と棄無為ふ入。是真の孝行。汝を憐れんとて又の錦の囊とよみて日中。阿弥陀經一卷あり。是に汝の父の常ふ身と故に与る者なり。今汝に授て是と誦て父の菩提と薦すと。源信あり。是と受て終ふ母を憐れし使の人お伴ふ。叡山ふ赴ぬ。斯く程うく江品小着。比叡山ふ登り良源上人に謁す。良源見て大に喜び。禁々として教授し。此時始て自ら先の夢を解して。切確して怠りり。十三才して剃髮し戒と受て法諱と源信と号す。良源姓ハ木津氏。江洲淺井郡の人也。延喜十二年九月三日小生。最應瑞。十二歳して叡山の理仙小師。事法性房尊意小見て受戒し。尋て頭密の秘奥とつけ。早く博学の名と得たり。承平五年維摩會に赴き。南都の義昭と對論を始。良源の年少を侮り。後義旨深宏々と聞て。衆徒も驚り。清冷殿に於て法華講を啓く。應和三年八月廿日二十の名徳

と召して分て南北互に講問せし。南都の法藏と叡山の覺りやうと。法藏と對論を南都勝。良源と法藏と對論。以藏員て閉口を一時梵網戒品と誦し。數句ふして光り出。康保三年八月天台座主小補せ。山勢と領する事二十年。天元四年大僧正とあり。輦と聽する。永觀三年正月三日称庵と唱て滅し。年七十四。其容白。道德雄強して自ら鏡と把り影と寫して曰く。我像を置ぬ。守邪魅と辟んと。此よりて模印して天下民屋の扉に黏る。謚と慈慧と賜ふ。以て叡山中真と号す。則ち叡山第十八の座主なり。世小慈慧大師と称し。俗ふ元三大師と号す。右に所謂南都の義昭。法藏。叡山の良源ハ。時の人。是を三沙門と稱す。然る小三人も正月三日寂と奇なりと云々。儲も源信の學業大に進む。其名世に傳る。時小村上帝の天曆十年六月勅。依くハ講師と号す。源信は年十五歳なり。機辨泉の湧く如く。宮中にて鳴り動く。勅命あり。布帛と賜て賞し。源信の時の面目世の聞へ何ぞ

寺に皈入し語を曰。源信の徳義一人の心と感し動かし吾曹の及ぶ
 妙ありすと。其推量ふたゞい。解行も亦其徳にまわく四方ふありと。大藏
 經とくると凡五遍。大衆小衆の法門も亦其奥儀を究む。五種法師。四種三昧
 をもつ。天台の奥儀一として薰練せざるあり。良源上人の門下高弟凡七十人
 就中神足四人あり。尋禪。覺超。覺運。源信あり。其中ふ於て源信は又魁と
 者あり。一年伊勢太神宮へ詣てあり。七日の間誓を立て。出離の要路と定めし
 わへ祈りてあり。七日満むる夜の夢よ。義なき貴女神殿の扉とむき出てつげ
 言ふ。出離生死頭證菩提の爲なり。末世の要法弥陀と念むるも如くはしと。
 此より後別して念佛と精修して。安養ふ生ぜんことを期も嘗て六波羅
 密寺の光勝空也上ふまゝとて問て曰。我極樂淨土を願ふ志深く侍り。往生遂
 げや否やと尋たまふ。空也答て云。我無智の者あり。いごとくそのこととを
 ろ侍らんや。但智者の申侍り。一事と聞て是と業むるふ。まづは生ぜん

其故に入六行觀と修して上界の定と得んと思ふに。下地の塵あり。苦あり
 障あり。上地の靜あり。妙あり。離ありとこととを信じて。下地の賤さをいと厭ひ
 上地の妙なること願へば其觀念の力も次第に進む。悲想悲々想まで
 至るべしとす。然れば極樂を願ふも又同一事あり。智慧行徳も亦穢土
 と厭ひ淨土と修むる心切らば。亦往生と遂ぐんと宣ひければ。源信
 是を聞て。實に理究侍りとして涙を流し學と合せて皈りありとぞ
 空也上人名は光勝。赤姓氏と詳まれば尾州國分寺に於て薙髮し。汝弥
 たり時自ら空也と稱し少くは供遊と好む。天下と殆ど修行し過る
 所の道路多く利濟とすと。鋤と荷ひ嶮と鑿。石と拾ひて濕り。破れ
 たる橋を再興して架廢る寺と修覆し。水なき地は井と穿ち。其水
 必に甘冷なり。天慶九年京に入。市中に於て弥勒の名号と唱て勸化
 する。入んで市上人と云。天曆九年天台ふのげり。坐主延昌に從ひて得度し同

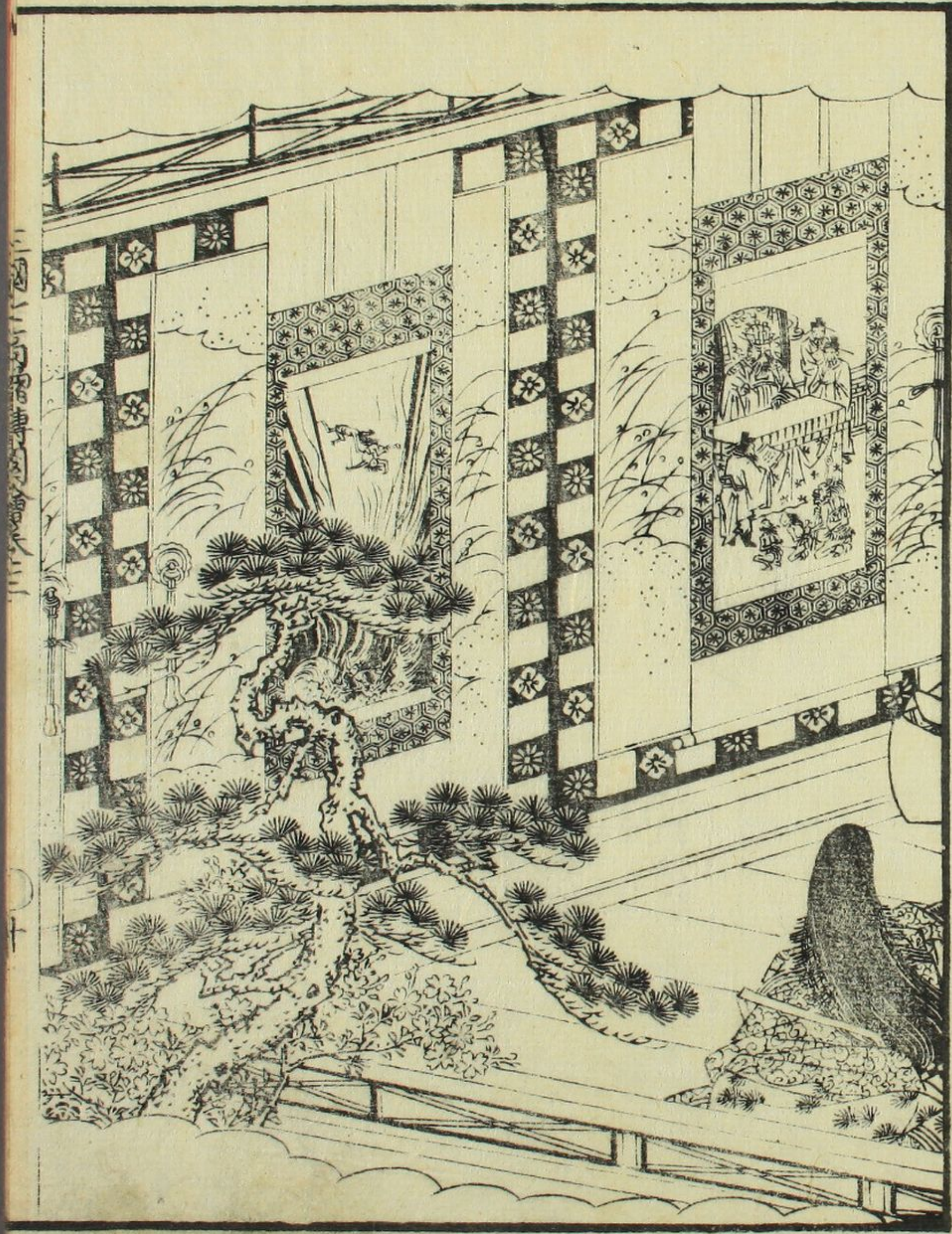
三國七高僧傳卷之三

五年自ら十一面觀音の像と刺し六波羅密寺と建てこれと安置も播州
揖保郡峯合寺に任して一切經と看讀も又雲林院に在り時松尾明神
來現して空也の衣と假り嘗て云く奥羽の二州に佛の化して少ありと
まらり佛像經論と負く彼より法を説く化は順ふ者多し圓融
院の朝天祿三年九月逝も壽七十

四

永觀元年九月源信年四十二歳より故郷に歸りて母公を見えり是より
先ふ數回書と送て歸りんとて乞ひをせり母公許り守りて云鳥の
母も猶も子と思ふ況や之に於て然れども母あはれて其道業を瘞
と欲多故りて是より母公を念ひぬと甚ど切なり因て思ふ
久く音信を假令仰小宵も一も訪ひ奉るんば有るんば若我
先ふ死せば後悔もんと及ん所詮母の許りなりども何を行せんとやして
奔足した途申して母公の書と持來る使あり其書に疾るんば重し師

くやく來り臨終の善知識とありて有源信ありて夜ふ入
宅に看母公不調なり母公且喜び且泣て日どこの日師と呼て對面せん
と思ひ正ふ今此時幸ふ相見りて得る宿縁の有るんを源信の
宣く念佛の事否や母答曰く何を敢てこれを忘まん然るも身心勞れ
て自警るふ力も又勸め勉むるも源信即ち念佛の功德淨土の莊
嚴を具し説き磨きして唱首より念佛も母公大喜ひの聲と勵
して得る念佛も三三百余遍身心苦も安祥して往生あり
源信の曰嗟呼我より行と砥ひる母も母も終て嗚呼ハ我
是母もれ子共善友あり蓋宿世の契なり諸人も嗟嘆せり永觀二年
十月往生要集本末六卷と草稿も明年四月全く成就し善導の釈義と祖
述し助る小經疏の文と以て淨土の衆行と叙るも肝要念佛一門を堅
又空也の言と憶して厭離穢土欣求淨土を先より時夢中に觀音



源信の獻る
下巻の画圖
紫宸殿
敷覽

三國七高傳圖繪卷三

九

大士だいしのまはりの微み笑えうて金蓮華こんれんけと授まく。毘沙門天ひしゃもんてん宝蓋ほうがいと捧たげてん徒たを見給みたまふ。
 又一僧またひとの夢ゆめを毘沙門天ひしゃもんてん。二個ふたごの天童てんどうと引連ひきつれて来きて告つて曰いわく。源信げんしんの製つくる所ところの往生おんじやう
 要集ようしふへ見み一聞ひときの傳つたへく無上むじやう菩提ぼだいと證あせん。一偈ひとくを加くわせせ流布りゅうふせしむし
 と此僧このそう源信げんしん小如せうにょ此このの由よしと告つるこれに依よて源信げんしん一偈ひとくをし加くわしてせ世よ傳つたへく
 朝廷てうていと始はり下くだ万民ばんみん小せうつままでて風かぜ小せう靡みく草くさの如ごとく其その化導けだうと慕あこむ。時ときの人ひと稱せう
 真まの佛ぶつ復たびせ出でるを言いふ。圓融院えんじゆういんの皇后けうごう藤とうの詮せん子し源信げんしんを請まをす
 宣のたまふ。要集ようしふの作つく實じつ小せう盡じんせりと謂いふ。然しかれども庸愚ようぐの徒た猶なほ亦また其その趣しゆと
 會得えいとくせん。願ねがひの画え小せうあらうて是これと示しさば解げ安やすくして利益りやく廣ひろからん。
 と因よて源信げんしん定ぢやう入にりて七日ななにちあらて眼まなこ前まへ小せう十界じゆかいの相さうと見みて画え小せうとしてこれと
 図ずせし。源信げんしん小せう良源りやうげん覺運かくうん覺起かくき小せうあらうて画圖えずの上うへ讚さんとせり。さらうて
 之これと皇后けうごう小せう奉ほうる。帝てい及および皇后けうごうとまく喜よろこひの以もて觀覽くわんらんせし。紫宸殿しじんでん小せう安置あんぢ
 一ひとつ。然しかるに夜よ深ふか更さら及およびて惡趣あくしゆの苦くるしみの声喧こゑ々々とて聞きくをあらう。後官こうくわんの官くわん女にょ達たつ六む小せう

五

恐怖おそれとて是これよう因よて源信げんしん小せう還かへりて數かず趣しゆ感かんあらうをれどもその圖ず今いま現あらはれ江州かうしゆ
 坂本さかほん来きた迎寺むかひでら小せう藏ざうりて什寶じふぼうとて世よ十界じゆかいの圖ずと稱せうとて其その推輿すいいとて
 十界じゆかいとて一ひと小せう地獄界ぢごくかい。二ふた小せう餓鬼界がきかい。三さん小せう畜生界ちくじやうかい。四よ小せう阿脩羅界あしゆらかい。五ご小せう人間界にやうかんかい
 六む小せう天上界てんじやうかい。七しち小せう聲聞界せうもんかい。八はち小せう緣覺界げんかくかい。九く小せう菩薩界ぼさつかい。十じゆ小せう佛界ぶつかい。以上いじやう十界じゆかい則すなはち
 寛和二年かんわにに正月しげつ源信げんしん作つくるをとての往生おんじやう要集ようしふとて以もて宋國そうこくの台州たいしゆの周文德しゆぶんてく小せうとて
 贈たまへ。文德ぶんてくとて天台たいたい山さんの國清寺こくじやうじ小せう寄附きよつづとて則すなはち當寺たうじの經藏きやうざう小せう納なむ。此この經藏きやうざうの中なか
 小せう架か三さん段だんあり。上うへの架かは佛經ぶつぎやうと置おく。中なかは菩薩ぼさつの論ろんと置おく。下くだは高僧かうそう達たつの
 章疏しやうしゆと安やすむ。初はつ小せう此この往生おんじやう要集ようしふと下くだの架か小せう置おく。その間まは上うへの架かあり。怪あやしく
 思おもひて是これと下くだせは還かへりて上うへの斯しのごとくと數かず回かいあり。因よて僧徒そうと評議へうぎとて
 終つひ小せうられて上うへの架か小せう安やすむ。宋朝そうてうの人ひと共とも小せう謂いふを云いふ。此この集しふ極ごくめ佛經ぶつぎやうと相あ應おうする
 也なり。あらうを感嘆かんたんせり。宋そうの帝てい此この要集ようしふと見みひて大だい源信げんしんの德とくと稱せうして欽慕きんぼ
 乃すなはち東とう小せう向かうひ。日東にっとう楞嚴院らうげんいん源信げんしん如來にょらいと稱せうす。又また日本にっぽん小せう釋迦如來しやくぢやにょらいと稱せうす。

時小寛弘三年寂照源信の宋國子至。帝勅源信の真影と見んことを望り寂照承て日本不飯了源信不如此の由と告源信延圓阿闍梨をこれと寫さり宋國不贈りる宋の帝はく赦覧ましく宜く眸子の容子頗る鼻是の真寫をりると得まし欲とと是と還りぬふ。
 源信その賞鑒と感と自ら画き贈りる帝これと赦覽ありく嘆と宜く是金く真像をりる塔廟と建立して其影像と要集と安置敬ひ給ふ正曆年中宋の朱仁聰船と汎て日本未り越前國敦賀の港ま着し此に泊る此仁聰へ博学ありて内典外典通じと聞及び源信同門の寛印とれどり敦賀不至り仁聰不見へり仁聰壁不展る画像と指て曰くの婆珊婆演底主夜神の海路守護の爲不持渡る處り二師知りや否やと問源信直不筆と採り華嚴經の善財讚嘆の偈と画の上に書り其文を謂く見汝清淨身相好超世間と書了て後と顧り寛印不次と書へと言ふ寛印乃ち書くといく。

如文珠師利亦如寶山王と仁聰急驚き嘆と云く二師の腸ハ大藏經の函なり乃ち二の椅子と設て食應り又國産の珍種と贈る長保二年八月茅子寂照復宋國不至源信天台の法門不せ七々余の疑問と作王寂照不とせ四明の智禮法師不決斷と求む又辟支佛の髮とりて贈る智禮此問書と見て大に嘆と曰く意さり東城本不斯く深解の人と出さんと乃ち答の教と作りて還す是よりと船の往來と毎不音問あり此問答の事如明然も其答の釋源信の意不稱るはと同三年三月十五日地藏院不在り端座一称名と不忽ち聖衆未迎と感じ紫雲室中にとり吳光目と奪り源信とれと圖り斯て地藏院の傍に一宗と建立し紫雲山と号し聖衆未迎寺と名く繪像とり中に安む今尚存り又一年不二の圖於て弥陀佛西峯の間に現ると見てまれと圖り今世不山越の弥陀の像とり洛東某の寺に源信圖とり丹の山越の弥陀の像と藏ひ其画像の上に兩偈と題を其辭と云く茅子天台僧源信正曆甲冬十一月謹圖阿弥陀化導衆生之

相。渴仰戀慕發願而言。佛光照耀。聖衆來迎。上品蓮臺。願得往生。上求下化。萬德究竟。□文珠願。□普賢行。久慕西方。素無貳。弥陀誘引。有時行。光芒新自眉間起。音樂忽教耳。界驚。永別故山。秋月送。遙望淨土。夜雲迎。直乘願力。吾先去。便導衆生。盡往生。

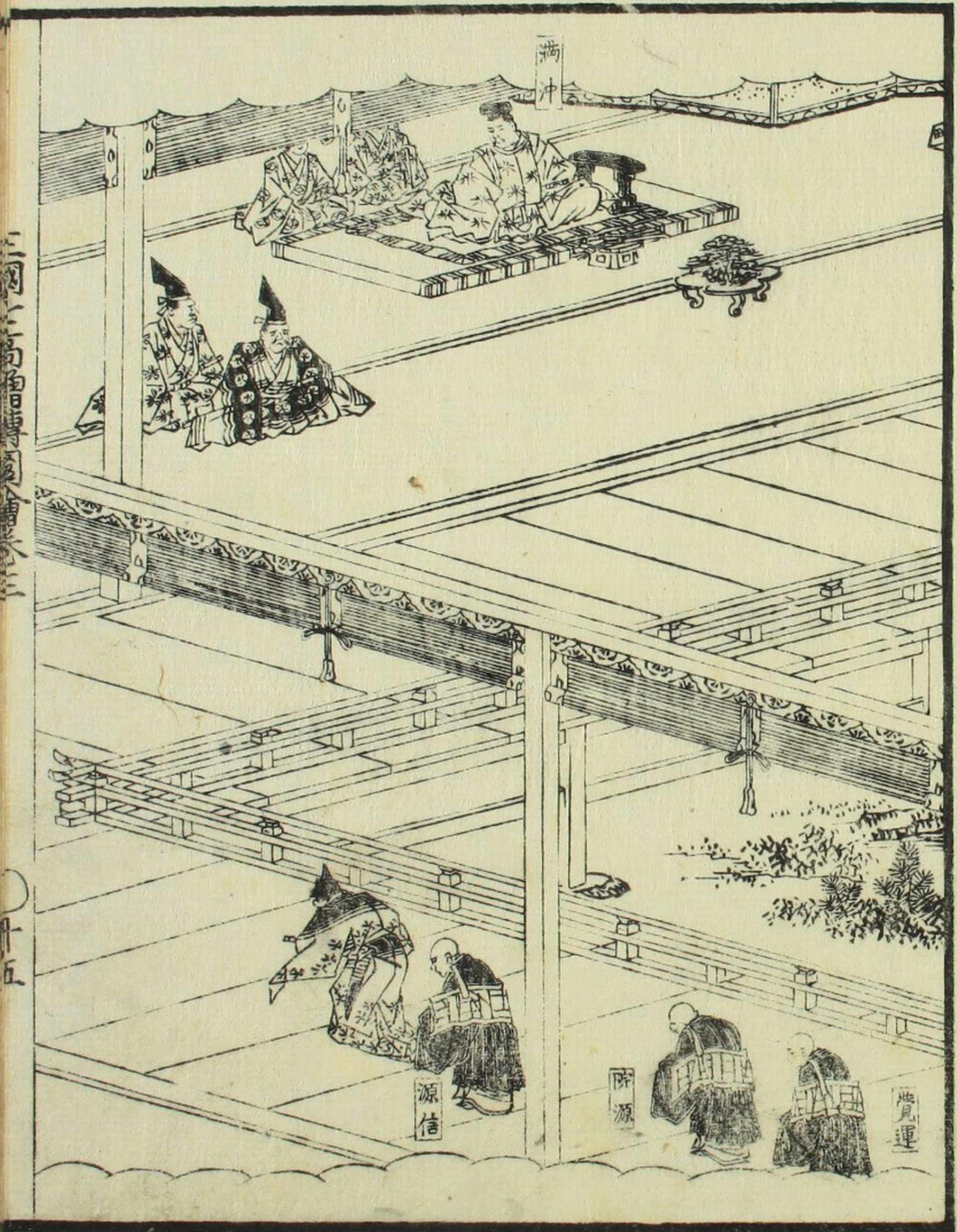
嘗て亦迎接會を創りし或は迎請といふ法樂は備へられと見聞との隨喜又隨喜といふし。おれ勝縁と結ぶ。一日華臺院又華臺院といふすまして。此邊供養と修行しつゝ。眞の佛来り手と授る感。うら源信乃ち密小其像と堂の扉小圖。且是と版木彫刻。紙少くして施しぬ。此邊供養の佛會今至て西林院當麻寺。天橋五木の諸所して修行せり。原ハ此源信より始る所なり。時の帝源信の高徳嘉しぬ。屢思遇と加ふして。内供奉し。十禪師小補。法橋少僧都小叙任一日天曆十年。講師し。ちれも未なり名利とて。述と幽閑ふかく。著述とて。つて身の職とて。うら蓋佛恩と報とあり。所謂往生要集。弥陀

經略記一乘要決。要法門對俱舍抄。因明相違注釋并小疏等。凡七十余部。一百五十卷ありて。あくせふ行る。天台の教法。此時盛つとす。程小笈と負ひ業と受んと。四方より来者。齋の如く集。寛印紹良嚴久等。この當時の同門なり。海内称し。惠心院の僧都とす。覺運と法義と角立と。後世惠心檀那の二流と云は是なり。覺運は泉州大鳥郡の人なり。姓ハ巨勢氏。知して叡山小工。天京奇相小く。舌と出せば鼻と起り。慈惠僧正これ見て。必國寶とると。則ち慈惠僧正小事ふ。時の皇后の御産を祈り。ちひる小御安産ありと。以て僧都小任せらる。是は檀那僧都と叙す。一流と云。源信ハ原来慈惠僧正の入室の弟子となり。その生質英敏。すし。ぬせ。螢雪の窓の前。あハ五時八教の奥。後鏡と掛く。明く。三觀十乘の妙理ハ掌と指て。委々磨る。僧正と他小く。不思召。一山も重く。ては奉。宗の法燈とらう。ぬき。と申る。案。あた。守天台中興の法將とて。芳名。吳朝まで流布し。たれば。惠心院の一流と称して。万世の龜鑑とらう。たす。

六

或云源信正教門を以て覺運不屬、親門を以て源信不屬と云ふ。これ故あるを以て、
 源信嘗て門人お語つて、或云源信正教門を以て覺運不屬、親門を以て源信不屬と云ふ。これ故あるを以て、俱舍因明ハ穢土お於てこれを究め、唯識ハ淨土を期と
 宗義ハ佛果と俟と。彼一乘要決ハ衆生皆成佛の旨とあり。定性無性の
 執を破ると夢馬孟龍樹の二大士頂と摩て讚嘆し、傳教大師合掌し告く、
 吾山の教法今汝お附屬と云ふを見たり。又八塔和讃を作て普く諸人お施し、
 深義解し易く遠近とれと慕を唱ふ。時お攝津守源滿仲仕へを致して攝州
 多田の別荘お住居と素よりその性勇敏おし常お遊獵を好む。教生と樂と守
 其息の僧源賢とれと諫むと云ふも用ひらば。因源賢源信おたのめて謀る。源信覺
 運院源と共に多田の別荘と訪ふ。滿仲云く嘗て諸師の道名と聞おひしと慕
 事久し幸ひお今日の來臨。老父と云ふ何事お是おらん。別室お誘ひ數
 餐應あり。滿仲嘗て弥陀の像と圖し。法華經と寫し、お出して見せり。又
 釋迦の像と出して併お慶讚と乞ふ。各其意お隨ひて之お讚と。斯て院源講師

とらつて法要と論説と滿仲聽聞して忽ち心おひら。只管先非を悔し終
 日と撰んで祝髮受戒せんといふ。源信の曰則明日ハ吉祥なりと。蓋しこれ
 其志の變せんことを慮りて斯言しと云ふ。乃ち滿仲その言お隨ひて翌日難深
 法名と滿慶と号と。其僚屬數十人これお後ひて出家と。次日源信密に
 覺運院源と證ひて迎接會と執行も。滿仲不圖異樂合奏し。聖衆未
 現ともと見て驚き感泣して。地お下つて禮拜し。是およりして信まら
 堅く遂お滅罪のたらし。寺と多田お建り。今多田院と号す。其始ハ
 源滿仲ハ清和天皇の曾孫として六孫王經基の子也。延喜十二年四月十日お生る
 武名と以て世お顯る。曾て鎮守府將軍正四位上陸奥守お任じ。村上帝天德
 四年。寇盜あつて夜滿仲の宅お入。滿仲とれと射殺し。遂お其黨と索得り。乃ち
 冷泉帝の安和二年。左大臣源高明太宰府の権帥お左降せり。時源繁延寺叛
 心あり。滿仲しそふ奏して。乃ちこれと捕らふ其黨甚多く。殆天慶の乱に滿仲



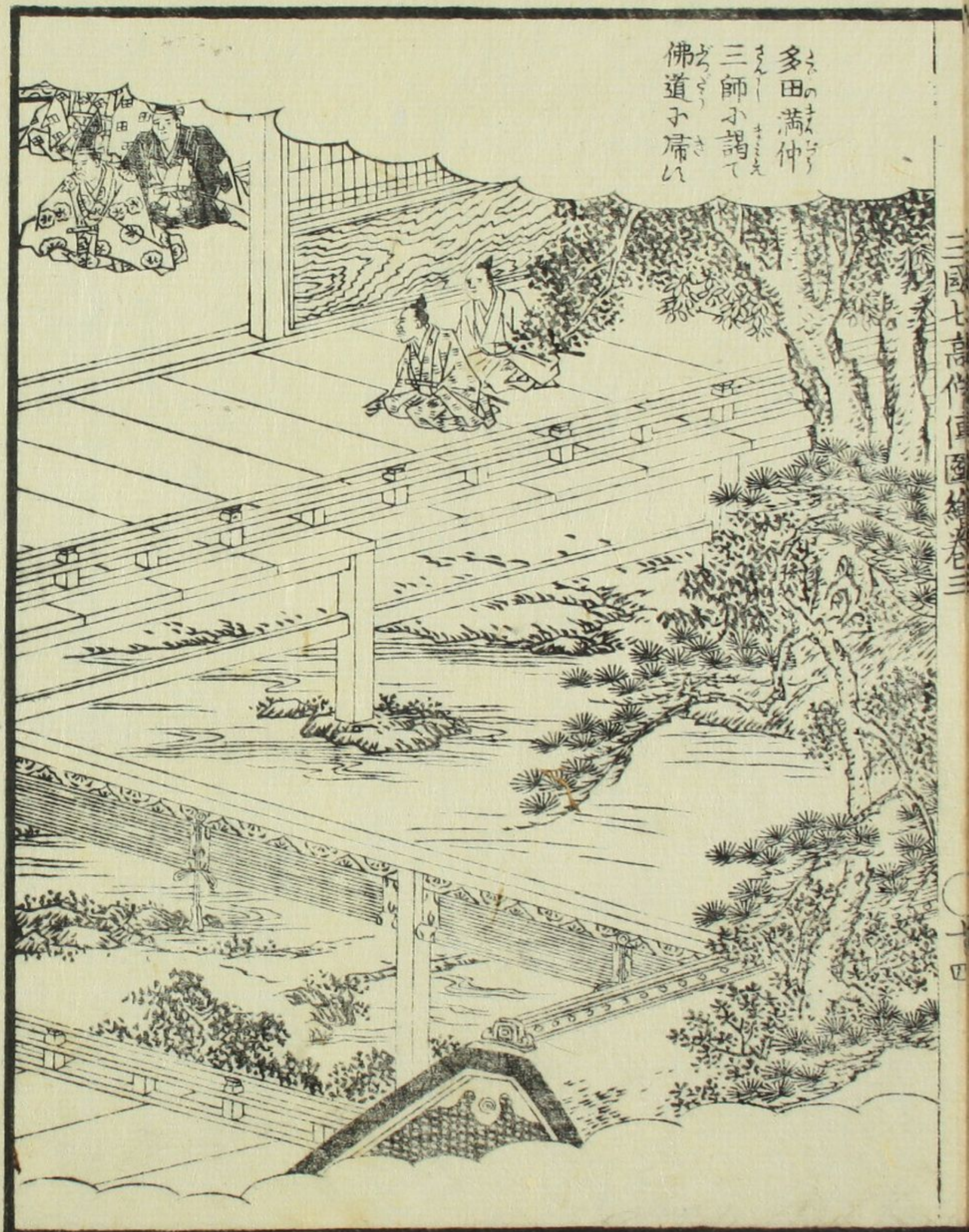
満沖

源信

隆源

覺運

多田満仲
三師小謁て
佛道子席に



七

其弟滿季と共ふ。藤原千晴及び其男久頼並小僧蓮茂ホと執ふ。皆其罪に伏せ
 其後貞元二年八月十五日歳六十六にて剃髮。法名滿慶と号して多田の院
 小居と長徳三年八月廿七日卒と年八十六と云。
 將軍平維茂源信小謂して止觀と云ふ。淨教を受け預め臨終の助念と約す
 時小病發して既小危る。程小使として源信と招請と云ふ。源信事
 あつて赴くと能ふ。之よりして迎接圖信實來と使者小あつて云。此画像小
 對し身心と修攝せば。是より加ふる事と。使者よりして維茂小あつてのよりと
 告る。維茂大おとらふ。合掌して像と禮し。即逝去と云ふ。
 平維茂ハ義忠の子也。伯父前將軍貞盛の養子となり。字と餘吾と云。故小
 世小餘吾將軍と稱と。武名を東列小赫る。一旦身と池水小潜め。急邊の
 難と避け。その寇奥州澤勝の諸任と殺とんと得たり。又信州戸隱山小入
 妖賊を退治と。其勇銳の氣以て觀とへと云。

六

都文士ハ一條帝小仕て。位三品小至る。儒行と云と名あり。常小佛法を
 誦と甚。老て重病小悩む。其子宰相高明源信と迎て父を教諭せしむるを
 乞。源信乃ち往て文士小對して謂て云。我小托たするたするたする。故小熊くまとくまとくまと。所
 不圖ふと公重病多り。因てとれと云へん。文士の曰く。つらう。修しゆやしゆ。疾しやくもしやく。苦くるかくる。守
 具小告ると。源信云く。此項佛閣ぶつかくを建たせせせり。公の詩と得て。とらて壁小貼置度
 小とらると。文士云く。其望そのぞらなそのぞら。六何の詩と云と。源信云く。九品淨土の相と賦
 せん。と欲と。文士の云く。我われもわれ。小其相と知らと。粗あらとあら。目と語ことばと。源信則
 詳こまくこま。逆惡往生の事と。目果應報毫髮と。錯さくとさく。と説く。茲こゝよりこゝ。と云
 の文士と忽ち邪よこしまと。正ただと。終小念佛と。逝去と云と。
 少丹記慶保胤ハ文士於て。當時雙たわと。寛和年間出家して法名と寂
 心と号と。源信小就て西方淨土往生の要と。一日参坊さんぼうと。師しと。謂いと。源信
 其時水想觀すいじやうくわん小入い。是こゝよりこゝ。齋さいのさい。一室いつしつ。一圓いつげん。小變かへと。水みづと。寂心じやくしんと。と云。

傍有あふ枕として彼水中に投じて臥する。翌日又寂心参りて師事すも源信曰く
 我昨日水想觀ふ入に汝水中小枕を投其す我胸中痛太。今又水想
 觀ふ入べ。其枕を取除べ。結伽跏坐して定ふ入なす。容漸滅て室中一圓の水
 をこ補て彼身は淨いなり。寂心直ち取除く。源信乃して本心と顯しつる
 痛さうて快しと言ふ。如坐坐禪觀法も自在と得之ると自力の成難きこと
 悟て予ら如き頑魯のそれ。豈敢てせんやと宣ひて。西方の往生と願ひぬ。一切の
 群生と勸めらふ。真如觀と修めらふ。文殊菩薩身と現して。實相と南溟の濱
 小説のよ。又源信の道徳高くして。普く神明感應りて。就中吉野山小詣のふと
 權現巫託して法義と開示りて。源信宗儀と問かす。且小對ふ。又如菟の神祠
 小詣りて。深更あ及び明神戸帳の中より。和歌の下の句と吟りふ。其句ふ
 「常々世ふ心もひか 源信より敢てその上の句と結てつら
 月花の情もそあふこと此と紀あ 面白くも簾の中より。葉賞ま

「まこと息外聞えと寂心うらふ有て共ふれと聞し
 又西海道と循歴して名山に登りて。靈窟を擇りて。神人影のぞく。後い道路
 と守護りぬ。或深夜お獨坐して法義と思惟しぬ。證文と尋んと思召バ
 忽火来て抗の上とて。其火のす。冥應あはとも。匿して語りたまふ。ば
 寛仁元年源信疾小罹ひて。念佛をくも。怠りぬ。隣寺の僧夢
 み金色の僧堂より下りて。源信合掌し微笑てこれと語りぬ。又或が夢み
 源信蓮華の上お臥しぬ。其傍小數万の蓮華と生じ。人有て問曰此蓮華の
 何の用や。尋らふ。忽空中小声あつて云く。これを極樂淨土よりし。と
 妙音菩薩の来現しぬ。所の蓮華より。當小西に向ふて去るべと。往生の
 二三日已前より。病惱をくく治して。身軀平日の如し。一旦院内の諸衆と召し
 告て云く。今生の相見今日限り。宗教不於疑。此夏あは是と問ひて
 決せし。程小大衆且問且泣。源信一一小辨しぬ。既して氣息疲れ

給ひて大衆と退るを。獨上足の弟子たる慶祐と留りて謂て曰。我一乘の善根
 事理の功德と以て。極樂世界も同向と而して。今二天童降と告て曰。我、弥勒
 菩薩の使たり。師ハ法華と持して善一乘と解と。此功德と以て當ふ天宮
 小生とて。よろて數方の天子拜し迎んとす。故ふ我等先これと報と。これ
 答て曰く。兜率天小生とんと希ひて。小生とて。我平生の志願ハ弥勒の
 佛國小生とあり。冀ハ弥勒尊の力と加て我と西小往しり。と
 天上より我願意と申上り。是よりて天童空小昇去。忽觀音大士
 来現し。是我素より之意と失さる所なり。汝と是と記せしと有る。此
 慶祐泣きとて。隨喜と。源信をかりて定印と結んで端坐し。面善圓淨如
 満月の偈文と唱て念佛して往生し。此歲後一条院六月十日寅時
 壽七十六僧成なり衆徒悲號と。寺院と動ずり。時天の
 音樂空中小響り。吳香四方小薰。或ハ音樂の聲西より来を。あは

東より西小考と聞く。艸木を悉く西小靡く源信嘗て三井寺の慶作法師
 親く談ひ互ふ先達と。往生し。の必むその生る所と告べし。約たり。
 此曉慶作後夜の行法とつとんを。堂の椽側小出く阿伽の水と嘗みず。亦
 忽つ源信白雲小乗と告て云く。我ハ是故佛靈山の聽衆化縁とて。ふとて
 今本去還るを見る。一は我ハ本極樂久住の居士化縁也。二は盡く 曰て使を横川小遣し
 源信と訪ひ。師とて。今曉命終せりと。其後一時楞嚴院に於て往生
 要集と講と。夢ハ神僧の形と現し。告て云く。我ハ是源信今極樂界ハ
 新華聚菩薩と名づく。汝要集と講と。隨喜小勝也。故小未て告と。つ
 抑源信若年より浄土の業と修と。暫くも悔らば。自記とて曰く。一生の
 念佛總計二十俱胝遍と。弟子その記と遺る。篋の中小得たり。又常小
 佛像と彫刻し。或ハ画と。數と。又千体佛と造りて。諸國小領ち安置
 たり。凡二十八ヶ所あり。其余傳持との殆海内小遍し。

諸又往生要集ハ始テ厭離穢土欣求淨土の旨をなすと菩提心を勸めり故不
 前よりさす。十界の相と始す。次ハ極樂の往生成就。十樂と奉なす。
 されハ源信の在世於テハ圓融帝の御后藤の詮子御所望ふらる。地獄
 餓鬼畜生等の形勢と繪らる。一觀覽おそる。帝と侍ら奉る
 局方おつらまで拜見ましく御感のあり。紫宸殿ふけおきあふ毎夜
 深更おつら。地獄の責苦餓鬼のうら。各聲と哭。宮中の諸人肝と
 消し魂と失いたる。故不惠心院返さる。まこと厭はる。三界六道
 の分野あり故不經より三界安んじ。猶一火宅の。と説たる。三界
 とハ地獄餓鬼畜生修羅人間天上是と三界六道と。又穢土も。其
 中ハ人間天上ハ善趣。地獄餓鬼畜生修羅と四惡趣と。尤厭離る
 べき所あり。此故ハ集まらハ大地獄と始りて。十六の別處に至るまで。委く
 是と示さる。六道生死の人間界ハ隔生即忘の故不前生の。と知と。未未又

尚知とらる。故不動も。れば有無の二見不墮。或ハ己が。と以て佛説の
 三世の因果と信せり。徒不惡業と造る。空く三塗不沈。佛とれとあされ
 ぬ。大徳不現。王法の牢獄あり。此世不今。眼前不罪と犯。時
 ハ王法とれと免さる。火罪断罪不あり。顯明之罪人得而誅之。陰伏
 之奸鬼得而誅之。現不顯たる罪人の誅と。所。竊不公の責不らる。
 心に口意の業ハ己が魂と知。未未の誅と受。皆人の知る所。非。公
 牢獄と。征罪の律と定。待。非。尚善人。入。又罪
 者。行。征罪。皆是自業自得。自ら作る。牢獄。
 征討。此理。未世の獄苦の道。難。知。佛ハ意と
 苦。教諭。是。以て源信の其佛語。依。多。正法念經の
 意。六道の善相と具。示。厭離穢土を勸。是。以て往生極
 若厭離の心と起。自力修道。源信尚及。是。以て往生極



源信往生して
三井の慶祚お
謂ふ

汝ハ昨日我往生と向ふ。弥陀の親類と云ふ。今ハ雨も降さる。雨も
 下り龍王の親類と有る。言ハ下部の候。愛宕高尾の峯。雲の
 下りて雨のあつと。知と云。比加ら。雨の降。推量せり
 御坊も所より後生と御知候と申り。浄土殿。實下郎の言も取不足れ。源
 信斯の如く出離生死の菩提心。下りて。下部も往生と尋ね。ま
 所多て辻。常ありて西傾く月。往生の心。管絃。絲竹の音。未迎の音楽を思ひ。心澄して常念佛。源信
 浦。夏。新於遣。夏。源信

より斯道心堅固の身と云ふ。余れが名利の恩極めて重りれば。常小礼と云ふ
 言。又西行法師の撰集抄。云。惠心僧都。横川。御身没り。胸の間。小
 青蓮華。三本。侍。忝。此事。世。聞。君。彼。蓮華と
 召。北嶺の衆徒。會議して進。固く辞。一本
 奉。命。下。時。学。徒。心。得。一本。進。残。二。本文。珠。樓。小。籠
 侍。君。召。蓮華。御堂。大殿。帝。外。祖。御代。平等院。寶藏。納
 程。其。御。方。傳。宇。治。殿。頼。道。の。御。代。平。等。院。の。寶。藏。小。納
 られ。侍。實。有。例。是。僧。都。平。生。往。生。の。信。心。浅。か。ず
 一生。不。退。小。称。名。佛。智。回。向。の。御。慈。悲。の。願。此。界。入
 佛。名。と。念。む。れ。西方。小。便。蓮。生。但。一。生。常。不。退。此。花
 還。此。間。到。迎。法。照。禪。師。の。弥。陀。の。化。身。善。導。の。後。成。天
 下。知。其。人。此。事。と。説。信。小。堪。又。蓮。佛。座。あ。て

より斯道心堅固の身と云ふ。余れが名利の恩極めて重りれば。常小礼と云ふ
 言。又西行法師の撰集抄。云。惠心僧都。横川。御身没り。胸の間。小
 青蓮華。三本。侍。忝。此事。世。聞。君。彼。蓮華と
 召。北嶺の衆徒。會議して進。固く辞。一本
 奉。命。下。時。学。徒。心。得。一本。進。残。二。本文。珠。樓。小。籠
 侍。君。召。蓮華。御堂。大殿。帝。外。祖。御代。平等院。寶藏。納
 程。其。御。方。傳。宇。治。殿。頼。道。の。御。代。平。等。院。の。寶。藏。小。納
 られ。侍。實。有。例。是。僧。都。平。生。往。生。の。信。心。浅。か。ず
 一生。不。退。小。称。名。佛。智。回。向。の。御。慈。悲。の。願。此。界。入
 佛。名。と。念。む。れ。西方。小。便。蓮。生。但。一。生。常。不。退。此。花
 還。此。間。到。迎。法。照。禪。師。の。弥。陀。の。化。身。善。導。の。後。成。天
 下。知。其。人。此。事。と。説。信。小。堪。又。蓮。佛。座。あ。て

五

源信僧都自画自講の文あり

法より心の根より心蓮の生むる。祝法一体の佛智の顕るるなり
 三悪道と出く人界へ生むるを大なる散らる。身の拙るるを
 畜生ふの劣らま。家の貧しくれども籤鬼の勝る。思ふに時
 とも地獄の苦むらむ。世の住るを厭便る。信心浅くれども本願
 深き故往生疑多し。妄念の本来凡夫の地体るれ。忘念の外心なる
 臨終の時まで一向忘念の凡夫あり有ると思ふて念佛を淨土参
 べ。蓮臺小舟を渡る時を忘念と多し。悟るる。妄念の中
 より申出る念佛の濁りも蓮の如くして往生決定疑あり

三國七高僧傳圖會本朝之卷横川終

明治十二年
卯一月新調

長正殿町
柳本角衛

